とある魔術の幻想複写《Fantasy copy》

月詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある魔術の幻想複写《Ｆａｎｔａｓｙ　ｃｏｐｙ》

【Ｎコード】
Ｎ４５８２Ｏ

【作者名】
月詠

【あらすじ】
これは、幻想複写（イマジンコピー）という能力を持った少年の話。
この小説には《オリ主》《チート》《御都合主義》などの成分が含まれております。閲覧の際には、注意してください。
※これは小説練習用なのでおかしな所があるかと思いますが、生暖かく見守ってください。

プロローグ（前書き）

初投稿なので、可笑しな所があるかも知れませんが、生暖かく見守ってください。

プロローグ

ここは、学園都市と呼ばれる東京都の三分の一ほどの大きさを持つ、人口２３０万人が集う、科学と学生の都市である。
そして、その学園都市で、八神蓮（やがみれん）と上条当麻（かみじょうとうま）は、とある人物と鬼ごっこを
していた。

「不幸だーっ」

「このバカ当麻っ！お前のせいで俺までこんなダルい鬼ごっこもどきをしなきゃいけなくなったじゃねーかっ！！！」

科学が進んだ学園都市内でフルマラソンをするのはどうかと思うのだが、捕まる訳にもいかないので、とにかく走る。

そもそも何故こうなったかというと、遡ること一時間前の話だったりする。

蓮は帰宅の途中に、当麻を見つけて声をかけた。

「お。当麻じゃん。これからどこか行くのか？」

「おう。ファミレスに無駄食いしに行こうかとおもってな。」

「俺もちょーどそんな気分だったんだ。一緒に行かないか？」

「いいぜ。」

…思えばこれが不幸の始まりだったと蓮は後々語ることになる。

ファミレスに入り当麻は苦瓜と蝸牛の地獄ラザニアを、蓮はミックスピザを頼んだ。

料理が来るまで時間があるので雑談をしていた二人だったが、男と少女の声が聞こえてきた。

「よぉー、ねーちゃん1人か～？」「こんな所で居ないでさ～お兄さんと遊びにいこうぜェ。」

声のしたほうを見ると、見知った少女が不良に絡まれていた。

「蓮ー。助けてやろうぜ。」

「そうだな。ダルいが、さすがにかわいそうだしな。」

と、言って助けに行った。

「おい、そこの不良。お前らもいい加減にしておけよ。」

フラグメーカーな当麻が不良に声をかける。

「あ？　何だてめぇらは？」

「お前らこんなのに手を出して、バカじゃねえのか？」

「なっ…なんだとっ！！　表出ろ！」

「なっ！だいたいコイツが誰かわかってんのか！」

激しく言い争う両者。

しかし彼らは気付いていなかった。

歯を食いしばって、肩を震わせている少女に。

「うっさいわぁっ！」

そういって少女は電撃を放ち、不良を全滅させた。

だが少女はまだ怒りが治まらないらしく、「アンタたちも黒焦げになりなさい！！」と蓮たちを追いかけてきたのだった。

「待ちなさいよぉっ！！」

そうこうしているうちに鬼の御登場である。

「げっ！ビリビリっ！」

この言葉で当麻は、鬼もとい少女の地雷を踏んでしまったらしい。

少女が、「ビリビリって…言うなぁっ！！」といって電撃を放ってきたのである。

そして、少女は電撃を放ったことで勝利を確信した。

だが、それは間違いだった。

自分が電撃を放った相手が二人とも、無傷で立っていたからである。

「で、何でアンタ達は傷一つないのかしら？」

「いやー助かった。当麻の右手があって良かったぜ。」

「上条さんをほめても何も出ませんよ？」

「チッ。」

「私の電撃をよけるなんてあんた達何者よ！」

少女がたじろくように言う。

「ただのＬＥＶＥＬ１と０だが何か？」と蓮が言うと、

少女は、「……今日のところは許してあげる。首を洗って待ってなさい！」

と言って暗闇に消えていった。

「…なんだったんだろうか？」

「…さあ？ダルいし、早くファミレスにもどろうぜ。」

「ああ。」

その後は普通にファミレスに飯を食べて帰った。

視点　少女

また、あいつ等だ。

ＬＥＶＥＬ５の私がどうして勝てないのよ。

こんなの扱いされたのに腹が立って、私は電撃を放った。

でも一度も当たらなかった。

しかもあれでＬＥＶＥＬ１とＬＥＶＥＬ０と言われた。

あの余裕さが怖くて私は逃げ出していた。

そして、今になって気付いた。

私がまた負けたことに。

次はあいつらに勝ってみせるわ。

私は心に決めた。

主人公設定

名前　八神蓮（やがみれん）

年齢　十六歳

能力　幻想複写（イマジンコピー）

異能の力を複写し、使いこなす能力。
だが、能力はレベルに関らずに、一日にたくさん使用できない。
その異能の事を少しでも理解していれば使用できる。

容姿　身長１６５ｃｍ。　顔はととのっていて、少しぼさっとした黒髪をピンで留めている。
肌はすこし白くてほっそりした体つき。

好きなもの　甘いもの　動物

嫌いなもの　退屈　ダルい事

趣味　無趣味

口癖　ダルい

性格　面倒なことには巻き込まれたくないが、退屈なのは嫌いという性格。

でもやるときはやるので、結構信頼されていたりする。

第一話　禁書目録（インデックス）（前書き）

一人名称になっていますが仕様です。気にしないでください。

第一話　禁書目録（インデックス）

今日は、夏休みの一日目、つまり七月二十日だ。

昨日走り回ってつかれたし、二度寝しようと思っていた俺は、突然の電話でたたき起こされた。

「何なんだよ…まったく。」

セールスか何かだろうか。

ダルいなぁと思いつつ電話をとる。

「もしもし、どちらさまですか？」

『あ、八神ちゃんですかー？出席日数が足りてないので補修ですー♪「ダルいんで拒否していいですか」先生にはそんなサービス有りませんよー？「マジですか…」後、隣の上条ちゃんにバカだから補修っていっておいてくださいねー』

ガチャ　　ツーツーツー…

オーケー。電話をかけて来たのはセールスじゃなかった。教師（サディスト）だ。

朝からダルいことが起きたが、これは当麻の呪いかなぁ。

とりあえず、朝飯代わりのウイダー〇ンゼリーを飲む。

十秒チャージなだけあって、すぐに無くなった。

そして、隣へ当麻を呼びに行く。

「当麻ー。ダルいけども、補修だってさー。行こうぜー。」

返事がない。ただの居留守のようだ。

よし、もう一度。

「当麻ー！ダルいけども、補修だってさー！！行こうぜーっ！！」

返事がない。ただの居留（ｒｙ

…よく見たらドアが開いている。

「当麻ー。はいるぞー。」

そう言って中に入る。

……ベランダに当麻とシスター？の格好をした少女が干されていた。

「……。」

「……。」

「失礼しました。」

バタン！！

即効でドアを閉める。

そして携帯を取り出し１１０…「まてまてまて！話せばわかるから！話せばっ。」

「ロリコン当麻の言っていることなんか信じられるかぁっ！！」

「今度菓子やｒ「よし。話を聴こう。」早っ！」

ちらりと少女の方を見ると何かを話そうとしている。

「ォ、ーーーーー。」

お、何だろうか？

まさか、英語なのではなかろうか。

「おなかへった。」

は？

「「……。」」

「おなかへった。」

「「……。」」

「おなかへった。」

「「……。」」

「おなかへった、って言ってるんだよ？」

は？

これが、禁書目録（インデックス）との出会いだった。

第二話　「おなかへった。」（前書き）

空腹で死にそうです。ｂｙ月詠

第二話　「おなかへった。」

「おなかへった、って言ってるんだよ？」

少女が話しているのは、日本語だった。

というか日本語意外に聞こえない。

「ぁぅ、えっと？」

「ナニ？ひょっとして、アナタはこの状況で自分は行き倒れですとかおっしゃりやがるつもりでう？」

「倒れ死に、とも言う。」

超日本語ぺらぺら少女だった。

「おなかいっぱいご飯を食べさせてくれると嬉しいな。」

当麻がすっぱそうな焼きそばパンを少女に渡す。

……それさっき当麻が踏んでなかったか？とか思わなくもないが、ダルいから口には出さない。

あと、なにかとても面白いものが見れるような気がしたからだ。

「ありがとう。そしていただきます。」

そう言って少女は焼きそばパンに、ラップごとかぶりついた。

……当麻の腕ごと。

当麻の叫び声が寮中に響き渡った。

さっきの面白映像はちゃんと携帯に保存しておいた。

ほら、人の不幸は蜜の味ってよく言うだろ？

「よし当麻、ダルいけど言い訳を聞こうか。」

「朝、ふとベランダを見たら干されてた。」

「そんなことがあってたまるかぁっ！！というかそれはどこのギャルゲーだぁっ！！」

「本当にあったんだ！それがっ！」

「うらやまsげふんげふん。ダルい事に巻き込むなっ。」

ギリギリで本音は隠せた。

正直、危なかった。

「いや、隠せてないから。」

「当麻。メタ発言は禁止だ。」

こんな感じで当麻とコントしていると、少女が、

「たすけてくれて、ありがとう。」と、言った。

「まずは自己紹介をしなくちゃいけないね。」

「……ぃゃ、まずは何であんなトコに干してあったのか――――。」

「私の名前はね、インデックスっていうんだよ？」

インデックスか。

変わった名前だなぁ。

とか思っていたら、当麻は怒り出してしまった。

「何が目次だ！　バリバリ偽名じゃねぇか！」

「見ての通り協会のものです、ここ重要。

あ、バチカンのほうじゃなくてイギリス清教のほうだね。」

まったく理解できない。

「インデックスさん、インデックスさん。意味がわかりません。」

「うーん、禁書目録（インデックス）の事なんだけど。あ、魔法名ならｄｉｄｉｃａｔｕｓ５４５だね。」

うーん。さっぱりわからん。

「もしもし？何ですか。この電波はー？」

「おなかへった～」

まあ、ほったらかすのもダルいので、ちょうどポケットに入ってい

た飴玉（糖分）をやる。

「ほれ。」

「ありがとうなんだよ。」といってインデックスは飴玉（糖分）を食べる。

そして、すぐにもう無いの？という様に見つめてきた。

……いくらなんでも早すぎだろう。

第二話　「おなかへった。」（後書き）

誰か感想をください。
感想をくれたらもっとがんばります。

第三話　オハナシ（前書き）

だれか感想を……
感想をください。

第三話　オハナシ

インデックスは、なぜか当麻の部屋を気に入ってしまったようだ。ようだ。床をゴロゴロしながら、「おなかへったー。」とか言っている。

「当麻、食材とかあるか？なんかもうインデックスがすごいことになってるし…。」

俺には、インデックスがとてもかわいそうに見えた。

それはインデックスが、「食材」や「お菓子」などの言葉に過剰反応を示したからだ。

というか食べ物がかかわる言葉を言うたびに、目をまぶしいほどにキラキラさせて、食べ物を貰えない

とわかると　神に見放されたような顔になるからだ。

「いや、昨日のビリビリ女が、電撃を放ったせいで冷蔵庫がお亡くなりになりまして……。」

「そうか……。」

やっぱり今日も不幸の星は当麻の元にあるようだ。

「まあ、食材なら俺の所に有るからダルいけどなんか作って持ってくるよ。」

「ごはん！」

なんか作ってを持ってくるという言葉に反応したのか、インデックスが、がばっと起き上がった。

便利な耳してるなぁと思う。

「蓮、ありがとうな。」

申し訳なさそうに当麻が言った。

「大丈夫。今度当麻になんか奢ってもらうからな！」

あ。なんか当麻の顔が絶望に変わった。

当麻は、感情の波が激しいなぁと思った。

とりあえず、野菜炒めを作ることにした。
こう見えても家事に慣れているので、１５分ほどで作ることができた。
そして、野菜炒めを当麻の部屋に運ぶ。
「飯できたぞー。」
と、言って中に入る。
中には全裸で無い胸を張るインデックスが居た。
バタン！
また素早くドアを閉め、携帯を取り出し、１１０ｂ「誤解だぁっ！」
…チッ。
今度は証拠写真もつけようと思ったのに…。
残念だ。
「で、何でこんなことになっているのかな？かっみじょーくん？」

俺は今まで生きていた中で一番良い笑顔をしているだろう。

手には、携帯とフライパンを持っているがな！

「いや、あの、そっ、そ、それは……」

俺とは対照的に当麻は、顔が引き攣っている。

「なに？言えないのか？じゃあインデックスに聞こう。」

と言うと、俺は、布団の中でもぞもぞと着替えをしているインデックスに聞く。

「インデックス。お前当麻になんかされたか？答えてくれたら当麻の分まで野菜炒め食べて良いから。」

布団がもぞもぞしていたのがぴたっと止まる。

どうやら着替え終わったようでインデックスが布団から這い出てきた。

「ごはん！」

「んで？どうなんだ？」

インデックスは当麻の方をちらりと見ながら言った。

「脱がされた。」

「…だってさ。かみじょーくぅん。ちょっと俺の部屋でオハナシしようか☆」

俺のオハナシという言葉に不穏な響きを感じたのか、当麻が逃げようとしている。

「逃がすかっ！」

と言って当麻の首根っこを掴んで部屋に強制連衡させた。

※此処からは音声のみでお楽しみください。

「で、何であんな感じになってたのかな？かな？」

「そ、それは誤解ですと上条さんは、弁解しますっ！」

「門等無用！」

「ぎゃあああああ！！！！」

第四話　魔術

当麻はボロボロになったが、俺の怒りも収まったし良しとしよう。

「いや、良くねぇから。」

「当麻。モノローグを読むな。…まあ、それは良いとして俺が料理しているときに何があったんだ？」

「それは、カクカクシカジカ…と言うわけなんだよ。」

当麻が事の起こりを話した。

結論

なるほどわからん。

「当麻、意味が分からない。というか魔術って何だ。魔術って。」

「魔術はあるもん！」

野菜炒めを食べ終えたインデックスが、怒った様に言う。

「…しょうがないだろ？分らないものは分らないんだし。」

ぽてんとインデックスの修道服の帽子が落ちた。
でもインデックスは気づいていない。

「でも、魔術はあるもん！」

良く考えて見ると、当麻の右手（イマジンブレイカー）でインデックスの服がバラバラになった。

そして当麻の右手は異能の力を全て打ち消すことができる。

つまりインデックスは、少なからず『異能の力』に関わっていることは確かだ。

「じゃあ、半分信じてやる。」

『異能の力』に関わっているとは言っても、全部が本当とは限られてはいないので

とりあえずこう言った。

「むう。半分じゃ無くて全部信じてほしいかも！」

やっぱり納得行かないらしく、インデックスは爪をガジガジと噛んでいる。

癖？

「蓮。そういえば何で俺の部屋に来たんだ？なんか用事でもあったのか？」

と当麻が言った。

あれ？そういえばなんかあった気がするな。

それの事で俺は、ダルいって何回か連呼した気がする。

……あ。補修だ。

「…当麻。補修だってさ。」

「は？」

当麻が固まった。

そして机の角に足をぶつけたらしく、そのまま悶絶すること三分弱。

俺は携帯を取り出し、悶絶している当麻を撮る。

また当麻のオモシロ写真が増えた―（笑）。

とりあえず当麻が回復したので話を続ける。

「とにかく補修どうする？…インデックスの事も。」

「インデックス。お前どーすんの？ここに残るんならカギ渡すけど。」

当麻が思い出したかのように言う。

…忘れてたのか。

「……いい。出てく。」

そう言うと、インデックスは、覚束無い足取りで当麻の部屋を出て行こうとする。

それを当麻と俺が引き止めた。

「お前、行くあてあるのかよ？」

たしかに俺もそう思う。

インデックスは学園都市の人間じゃ無い。
逃げられるという確証も無い。

「当麻に匿ってもらえば？」

でもインデックスは首を横に振る。

「…ここに居たら君達に迷惑がかかるから。もう、君たちみたいな人を、魔術師達と巻き込ませたくないしね。」

そう言ってまたインデックスは部屋から出ていこうとしている。
当麻がインデックスを引きとめようとし、扉に足を打ちつけ、携帯を落として皹が入った。
…シリアスな雰囲気が台無しだ。

「ぅ、うううううう！ふ、不幸だ。」

…なんというかご愁傷様です。
とは、ダルいから思わ無いけど。

「不幸と言うより、ドジなだけかも。」

インデックスが少し笑いながら言った。

「けど、仕方ないのかもしれないね。」

「どういうこと？」

前々からその事が気になっていたので、俺はインデックスに聞く。

「幻想殺し（イマジンブレイカー）っていうのがホントにあるなら、“神のご加護”とか“運命の赤い糸”そういうのをまとめて消してると思うよ。」

「つまり？」

「右手があるだけで“幸運”のチカラを消しているって事だね。」

ヤバイ。

笑いが堪え切れない。

「不幸だぁあああああああああ！！！」

当麻が五月蝿かった。

まあ、気持ちは解らんでもないがな。

とりあえずこう言っておこう。

「ご愁傷様です（笑）」

こんなことよりインデックスの事だった。

「で、どうするんだ。」

当麻が聞いた。

「教会まで逃げ切ればかくまって貰えるはずだから。」

インデックスは笑顔で言った。

修道服の帽子を忘れていったと止める間もなく、

「じゃあ、もう行くね。ごはんありがとうなんだよ。」

と言い残してインデックスは走って行った。

「行っちまったな。」

「…ああ。」

ふと、時計を見る。

…０８：５０分。

「当麻！補修！」

「ふぇ？ってのわあああっ！」

「「遅刻だあああああああ！！！！」」

俺と当麻はダッシュで登校する事になった。

第五話　学校（前書き）

更新遅れてすみませんでした。
少し体調崩してました。

第五話　学校

「はーい。それじゃ先生プリント作ってきたのでますは配るですー。それを見ながら今日は補修の授業を進めますよー？」

結局俺達は遅刻した。

もちろん俺と当麻は小萌先生にこってりと絞られた。

子萌先生というのは、年齢不詳の幼女先生の事だ。

幾つなんだろうな。マジで。

「おしゃべりは止めないですけど先生の話は聞いてもらわないと困るですー。

先生、気合を入れて小テストも作ってきたので点が悪かったら罰ゲームはすけすけ見る見るですー。」

すけすけ見る見るとは、目隠しでポーカーして十回連続で勝たなければならない代物で、

そして勝てるまで帰れない。

まあ、一言で言うと透視能力（クレアボイアンス）の時間割（カリキュラム）だ。

そして、とても面倒臭いと言うやつなのだ。

「でも、上条ちゃんと八神ちゃんは記録術(かいはつ)の単位足りないのでどの道すけすけ見る見るですよ？」

……。

「せんせー、拒否権は有りませんかー？正直ダルいですー。」

と、ダルさ全開で言ってみる。

「そんなものは存在しないですよ？あとそんなダルさ全開で言ってもどうにも成りませんよー。」

「マジでですか…。」

知らなかったぜ…。

「連はどうにか成りそうだからいいけどさ。俺はどうなるんだよ…。」

なんか少しほったらかしになってた当麻が言った。

「知らん。」

ちょっと突き放してみる。

当麻がいつもの様に不幸だーとか言った。

やっぱり当麻で遊ぶのは面白い。

「…むう。子萌ちゃんはやがみんとカミやんがかわいくて仕方ないんやね。」

青髪ピアス、通称青ピが言った。

ちなみに青ピの本名は忘れた。

だって、どうでもいいし。ダルいし。

「青ピー。なんならかわりにやっていいぜ。なあ当麻。」

「ああ。青ピ、ロリコンだしな。」

「あっはーッ！『ロリ』が好きとちゃうでーっ！『ロリ』も好きなんやでーっ！！」

まさかの守備範囲バリ広発言。

「はーいそこっ！それ以上一言でもしゃべりやがったらコロンブスの卵ですよー？」

コロンブスの卵とは難易度超高の文字どうり何の支えも無く卵を机の上に立てるやつで、
卵を割らないようにするのが難しいと言うあれだ。

「おーけーですかー？」

子萌先生がマジ怖かった。なんとも恐ろしい笑顔だ。

というか『可愛い』と言ったら喜ぶくせに『小さい』と言ったら怒るのは何故だろう。

そこまで変わりは無いと思うけど。

そーだ。疑問と言えば…

「なーなー、青ピ。お前、関西人なんだろ？」

「そうやでー。」

「じゃあ、関西人ってたこやきばっか食ってんのか？というかお前は関西人なのか？」

「関西人や！「じゃあたこ焼きは？」ないやろ？…たぶん。…あれ？」

疑問は解決した。

結論　青ピは似非関西人だった。

この結果を当麻に報告しよう。

「当麻！青ピは似非関西人だった！」

「……。」

返事が無い。無視されたようだ。

俺のただのガラスと見せかけて、実は強化ガラスのハートにひびが入ったよ。確実に。

四・五ミリぐらいの。

「当麻ー。おーい。」

「……。」

また無視された。

ならば、ダルいけど奥の手を使おう。

「子萌せんせー！当麻が窓の外ばっかりみてまーす。そしてその視線の先にはっ！
女子テニスのひらひらがありまーす！」

「あん？」

「…、」

子萌先生がずがーんって感じで落ち込んでいる。

そしてクラス中の視線が当麻に突き刺さった。

なんというか…計画どうりだ。

というか、当麻が無視するから行けないんだからなっ！

俺は悪くないんだからな！

第五話　学校（後書き）

感想を…誰か感想をくださいっ。
マジでお願いします。

第六話　ビリビリ（前書き）

今回もグダグダです。

関係ないですけど、ツンデレって良いですよね。

第六話　ビリビリ

俺は能力をフル活用したから補習（地獄）から早く抜け出せたものの、
当麻は子萌先生から個人指導を受けていて帰るのが遅くなりそうだ。
そして能力を少し使いすぎたせいか、頭痛がする。
そう思ったので当麻を待たずにちゃっちゃと帰ることにした。
だって待つのがダルいしー。

「ちょっと待ちなさいよ！アンタっ！止まりなさいよっ。」

常盤台中学と思われる制服を着た女子がものすごい大声で誰かを呼んでいる。
はっはっはー。やけに元気だなぁ。最近の中学生は。

「アンタよ、アンタっっ！！」

ものすごく五月蝿いから振り返ってみる。
何かどっかで見たことがあるようなやつが居た。

少し考えてみる。

ああ、ビリビリだ。

「というわけで、どうしたビリビリ。」

「なにが、というわけでなのよっ！それと私はビリビリじゃない！御坂美琴って言う名前があるのよ！」

むぅ。何が不満なんだろうか。

俺は敬意を払ってビリビリと呼んでいるのに。

「じゃあ、ビリ子で。」

「アンタ、私の話聞いてなかったでしょっ！」

うん。半分以上聞いてなかった。

「で、ビリ子、何のようだ。ダルいけど話を聞いてやろう。」

「何でアンタそんな上から目線なのよ！あと私は御坂美琴よ！名前くらい覚えなさい！」

ちっ。

「じゃあ、御坂。」

「…なによ。」

「ダルいから帰ってもいいか？」

「駄目よ！アンタ私と戦いなさい！戦ったら帰っていいからっ！」

えー。ダルいー。

でも、戦わないと本当に帰してくれそうに無いしな。

そっちの方がめんどくさそうだから、とりあえず戦う事にした。

「分かった。でも、此処でやると色々と面倒だから移動しようぜ。」

面倒と言うのは、さっきから俺達のほうに道行く人たちの視線が集まっていた事だ。

まあ、無理も無いだろう。

エリート校の常盤台中のお嬢様が、その素振りを見せないくらいに大声で話していたら誰だってビビる。

御坂も視線に気づいたらしく、ちょっと慌てながら「分かった。」と言った。

うんうん、素直な子は俺好きだよ。

いま俺たちは、どっかの橋の下の河川敷にいる。

時間が時間のためか、もう辺りは少し薄暗く日も沈みかけている。

「じゃあ、やるわよっ！」

そう言って、御坂は嬉しそうに電撃をビリビリさせている。

…そうかコイツ戦闘狂（バトルジャンキー）なのか。

「…ダルい。」

俺は、多分御坂とは対照的にめんどくさそうな顔をしていることだろう。

とか思っていると御坂が電撃を放ってきた。

そしてその電撃は俺の目の前で消えた。

「それ…あのツンツン頭のほうが使っていたわよね？アンタのもあれなのかしら？」

御坂が少し焦った様に聞いてくる。

「いーや。ちがうよ。まあ見てなって。」

そう言って俺は御坂に電撃を放った。

「多重能力（デュアルスキル）！？」

御坂の方を見ると御坂はすごく驚いている。

それもそうだろう。

さっき自分が放った電撃を打ち消され、そして、その相手が自分と同じように電撃を放ったのだから。

だが電撃は、御坂の顔ギリギリで当たらなかった。

そして俺は御坂が電撃に気を取られている隙に身体強化の能力を使い、御坂の目の前に立った。

そしてそのまま御坂のでこに、でこピンした。

「??」

御坂は一瞬自分が何をされたのか分からなかったようだ。

まあ、それが普通の人の対応だと思うけど。

「はい。俺の勝ち。」

「……へ?」

御坂はまだ状況を理解していないようだった。

目をパチパチさせている。

「おーい。御坂さーん。生きてますかー。」

ちょっとふざけてみる。

「…生きてるわよ。」

やっと御坂からの返事が返ってきた。

「まあ、御坂が生き返ったことだし、俺帰るぜー。」

と、言って帰ろうとする俺を御坂が引き止めた。

「待ちなさいよ。聞きたいこととかが山のようにあるんだけど。」

そう言われても帰りたいものは帰りたいので丁重にお断りした。

つもりだったが、なぜか俺は今御坂に聞き込み調査されている。

…なぜに？

「…で、何でアンタは電撃を防いで、しかも身体強化が使えたりしたのかしら？もしかして…多重能力（デュアルスキル）？」

「なかなか確信を付いているが少し違うな。」

「じゃあ、何なのよ。」

「俺のは幻想複写（イマジンコピー）と言う能力で、異能の力ならなんでも複写できる。」

「なによ、それ。すごいチートじゃない！」

実はそうでもない。

複写はできるものの、あんまり使いすぎると頭痛とかが酷い。

まあ、だからレベル一なんだけど。

俺はその事を御坂に話した。

「だからアンタレベル一なのね。」

御坂は少し納得した様に言った。

納得してもらえて何よりです。

「そういえば、アンタ名前は？」

そういえば、出会ったときから逃げ回っていて、名乗ってなかった気がする。

「八神蓮だ。」

「じゃあ、蓮。電話番号とか教えなさいよ。」

「どして？」

「私が戦いたいからよ。」

能力を使いすぎると頭痛がすることをもう一度言ったが、「使い過ぎなければいいじゃない。」と返され
結局電話番号を教える羽目になった。

「あ、そうだ。御坂これやるよ。」

帰り際、そう言って俺は御坂にお菓子一（〇まい棒と飴）をやった。

「…なによ。これ。」

「なぬ！？御坂お前、○まい棒知らないのか！？」

誰でも知ってる○まい棒をなぜ知らない！？

「知ってるわよ！そうじゃなくて、なんで私にこれをやったかって事よ。」

そう聞かれると特に理由無いな。

「糖分補給？」

「…そう。」

「じゃあ俺帰るから。じゃーねー。」

そう言って俺は寮に戻った。

第六話　ビリビリ（後書き）

感想・意見・評価は随時お待ちしております。

第七話　魔術師（前書き）

更新遅れてすみませんでした。
次はもっと早く更新できると思います。

今回は無駄に長いです。
そしてとってもグダグダです。

第七話　魔術師

俺が御坂と別れて少し時間がたち、寮の近くまで来た。

御坂と戦って、時間が経過してしまった為か、辺りは暗い。

やっぱり戦わなければよかったかなー。

俺がそんなことを考えていると、いきなり激しいめまいと頭痛に襲われた。

尋常じゃ無いほどの痛み。能力をたくさん使った所為なのだろうが、ここまで痛かったのは初めてだ。

いつもならば気分が悪くなり、頭痛がする程度なのだが、今回は歩くのがやっとだった。

少し歩くと寮に着くぐらいの距離だから大丈夫と自分に言い聞かせ、俺はふらふらと、覚束無い足取りで歩いた。

ふらふらとよろけながらも、俺は何とか寮に着いた。まだ、めまいと頭痛がしており、むしろさっきよりも悪化しているぐらいだ。

俺なんか悪い事したかなぁ。

突然寮から、大きな爆音が聞こえた。

「！？」

ぼやけてよく見えない目を擦って寮を見る。寮の一角から一瞬だけ、大きく火が燃え上がって見えた。

そのとき、嫌な予感がした。でも、俺はそれを無視して、体を引きずるようにしながら、火の見えた階に進んでいく。

着いた階というか俺と当麻の部屋の前は、あまりにも無惨な状態だった。

金属の手すりは飴細工のようにひしゃげ、床のタイルでさえも接着剤のように溶け出している。

壁の塗装は剥がれてコンクリートが剥き出しになっている。

「蓮！！」

俺が来たことに驚いたような声が聞こえてきた。俺は、声のした方を振り向いた。

目の前に、現実ではありえない…いや、現実であってほしくないものが映った。

———それは、血まみれになったインデックスと、ボロボロになってまで戦っている当麻。

そして、漆黒の修道服を着て、余裕の笑みを浮かべながら当麻と戦っている男。

その男を見た瞬間、俺はインデックスの言っていたことを思い出す。

『もう、君たちみたいな人を、魔術師達と巻き込ませたくないしね』

じゃあ、あの男が魔術師と呼ばれる存在なのだろうか？

そう思ってからの、俺の行動は早かった。俺は、頭痛やめまいを無視してインデックスに駆け寄る。

「大丈夫か、インデックス！！」

インデックスは、大量の血を流しながら答えた。まるで機械のような、あまりにも感情の欠落した瞳で。

「はい。大丈夫です。」

目の前の少女が、インデックスなのに、インデックスじゃない気がした。

「イン…デックスだよな？」

「はい。私はイギリス清教内、第零聖堂区『必要悪の教会（ネセサリウス）』所属の魔道書図書館です。
正式名称はＩｎｄｅｘ－Ｌｉｂｒｏｒｕｍ－Ｐｒｏｈｉｂｉｔｏｒｕｍですが、呼び名は略称の禁書目録（インデックス）で結構です。」

機械のように淡々と言葉をつむぐインデックス。一言言うたびに血があふれ出している。

そんな事を考えている間にも、当麻と魔術師が戦っており、魔術師の放った火が轟々と燃えている。

「インデックス、俺になんか出来る事とか無いか？出来ることなら何でもするからさ。」

自分にも何か出来ることが有るかもしれないと思い、俺はインデックスに聞く。

だがインデックスは、機械のように冷静な声で言った。

「ありません。この傷を治すには、魔術を使えば早く直りますが、あなたは魔術を使うことが出来ませんので。」

今の俺は、魔術を使うことが出来ないし、能力を使うことも出来ない。

如何すればいいのだろうか。そんな事ばかりが、頭の中を駆け巡る。

ちらりと、当麻と魔術師のほうを見る。魔術師はまだ余裕そうだが、当麻は、ぼろぼろになって戦っている。

そして、ある物が俺の目に入った。それは、大量のコピー用紙だった。周りを見渡すと、至る所に大量のコピー用紙が貼ってあった。

「なぁ、インデックス。あの大量のコピー用紙っていったい何？」

「ルーンです。『魔女狩りの王（イノケンティウス）』を攻撃しても効果はありません。壁、床、天井。辺りに刻んだ『ルーンの刻印』を消さない限り、何度でもよみがえります。」

コピー用紙で魔術は起こせるのか。そんな事を考えていると、あるひとつの考えが頭に浮かんできた。

そうか、と思いふらふらとよろけながら、俺はとある場所に向かった。

視点　魔術師

「君には出来ないよ。この建物に刻んだルーンを完全に消滅させるなんて、君には絶対に無理だ。」

僕は、きっぱりとそう断言した。なぜならば、インデックスが話していたように『魔女狩りの王』（イノケンティウス）を攻撃しても効果が無いからだ。

『ルーンの刻印』を消さない限りは、力は発動し続ける。まあ、『刻印』を消されてしまえば意味は無くなるけれど、この短期間で『ルーン』を完全に消されることは無いはずだろう。

「ちっくしょう！一体全体何なんだよこりゃあ！！」

今戦っている相手が絶叫している。

どうやって『ルーンの刻印』を全て剥がすのかを、考えているのだろうか。顔に焦りがある。

だけど、もう時間が無い。神裂がインデックスを斬った時に『歩く教会』が効いていなくて、インデックスを疵付けてしまったから、予定よりも回収に時間がかかってしまった。

『歩く教会』は絶対防御として知られていて、本来なら法王級の結界が破られるはずはなかったのに、どうして破られたのだろうか。

其れだけが気がかりだ。

「あいにく、もう僕には時間が無いんだ。だから、これで終わらさせてもらうよ。

――――世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ（ｍｏｗｏｔｅｅｔｏｉｉｇｏｉｉｏｆ）。」

これで、やっとインデックスを保護することが出来る。

「それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり（ｉｉｂｏｌａｉｉａｏｅ）。

それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり（ｉｉｍｈａｉｉｂｏｄ）。

その名は炎、その役は剣（ｉｉｎｆｉｉｍｓ）。

顕現せよ、わが身を喰らいて力と為せ（ｉｃｒｍｍｂｇｐ）――――――――――ッ！」

轟！と『魔女狩りの王（イノケンティウス）』が姿を現す。

勝った、と思った瞬間に、その思いは覆された。

――――なぜならば、確かに目の前にいた『魔女狩りの王（イノケンティウス）』が跡形も無く消え去ったからだった。

視点　上条当麻

魔術師の目の前にいたはずの『魔女狩りの王（イノケンティウス）』が突然消えた。

それと同時に、建物中に設置された火災報知器のベルが、いっせいに鳴り響いた。

「！？」

俺は思わず天井を見上げる。

そして、一秒すら待たずに取り付けられたスプリンクラーが台風のような人口の雨を撒き散らす。

「なっ。」

『魔女狩りの王（イノケンティウス）』が消えたのは、魔術師も予想外だったようで、うろたえている。

あたりを見渡す。よく見るとコピー用紙のインクが落ちていて、スプリンクラーが生み出す人口の雨が降り注ぐたびに、黒い肉片が一つ、また一つと空気に溶けるように消えていっている。

そうか、水に濡らせばコピー用紙は破れなくても、インクは落ちる。

如何して俺は、こんなに簡単なことに、気づけかったのだろうか。

魔術師もこの事実に気がついたようで、何度も叫ぶものの、やはり何もおきなかった。

俺は、うろたえている魔術師に近づき、拳を握る。

相手が『異能の力』出ない限り、何の役にも立たない右手で、俺は目の前にいる魔術師を力一杯ぶん殴った。

視点　八神蓮

火災報知器がちゃんと働いてくれて良かった。

俺の考えは当たっていたみたいで、『魔女狩りの王（イノケンティウス）』のルーンはコピー用紙で出来ていたから、水をかければ当然インクが落ちて、使えなくなる。

ルーンがコピー用紙で出来ていて本当によかった。そのまま、床や天井に彫られていたら駄目だったかも知れない。

めまいや頭痛も少し治まったみたいで、少し楽になった。

俺はエレベーターを使い、当麻と魔術師がいる階に着いた。

着いたときに目に入った、伸びている魔術師のことは気にしないで、

俺は当麻に駆け寄る。

「当麻、大丈夫だったか？」

「ああ。あの火災報知器を押してくれたのは連だろ？ありがとな。」

「そんなことより、インデックスのことが最優先だ。インデックスと一緒にここから出るぞ。」

インデックスは学園都市の人間じゃない。今の火災報知器の音で救急車や消防車が来るはずだ。

おまけに野次馬まで来るだろうから、インデックスが進入したことがすぐにばれてしまう。

「ああ。」

俺の言いたいことを理解したのか、そう言うと、当麻とはインデックスを担いだ。

そして、俺と当麻とインデックスは、急いで寮を出た。

第七話　魔術師（後書き）

感想・評価・意見は随時お待ちしています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4582o/

とある魔術の幻想複写《Fantasy copy》

2011年9月8日21時34分発行